走り読み文学探訪リバイバル(その12)

「四千万歩の男」　著者　井上ひさし

講談社 蝦夷編(上･下)(1986)各2,300円(約600p),伊豆編(1989)2,300円(749p)

紹介者:榎本博康

［紹介］

伊能忠敬(ただたか)は200年前に，初の日本全国海岸地図を制作した人物だが，その小説化である。

いきなり，「901,902…」と歩測をしている場面から始まる。２歩で１間の一定の歩幅で，深川黒江町の自宅から永代橋までの道のりを計っているのだ。時は寛政12年(1800)の正月，忠敬測量開始の年である。

下総(千葉県)佐原で名主まで勤めた忠敬は，49歳で隠居し，江戸へ出て天文学者，高橋至時(よしとき)の弟子になる。やがて子午線１度の長さを実測し，世界で最も正確に地球の大きさを定める，大望を抱く。

この年，幕府の測量方という身分を得て，蝦夷東海岸の測量の旅に出る。各地で，幕府のスパイに間違えられたり，事件に巻き込まれながら道を重ねる。

本書は長編であるが，彼の測量した３万５千ｷﾛﾒｰﾄﾙ，つまり約４千万歩の，序の口でしかない。

［感想］

最近は，走って日本一周や縦断をする人が増えている。アメリカ大陸横断や，豪州横断もある。大変なチャレンジであり，私もまとまった時間がとれれば，例えば佐渡島一周217kmような，そのミニ版でも良いからやってみたいと思う。しかしながら，忠敬の史実を前にすると，そのいずれもがかすんでしまう。

所で，忠敬という人は自分の努力と運で人生を切り開いてきた人である。６歳で母親が死ぬ。すると入り婿の父親は実家に返されてしまう。10歳で引き取られるまで，母方でつらい立場だったようだが，この期間に自立を決意したのだろう。それからは寺で数学を学んだり，医学を学んだりするが，優秀さが世間に知られて，17歳で伊能家の婿養子になる。年上の妻，ミチは再婚であった。このミチは家業に厳しく，忠敬は一切の道楽を許されなかった。忠敬は期待に

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.

応えて才覚を持って働き，傾きかけていた伊能家の財を極めて豊かにした。そして38歳の時にミチが死ぬ。

ミチから解放された忠敬は，独学で天文学の勉強を始めたが，再婚の妻も死ぬと，隠居して江戸で至時に弟子入りする。53歳の時に内縁の妻としたエイが，この小説でも重要な役割を演じるが，数学と製図ができるひとであり，地図制作に内助以上の功労があったらしい。忠敬は幕府の臨時役人となって測量の旅に出るのだが，経費の大部分は忠敬の自弁だった。その金は，とりもなおさずミチに尻を叩かれながら築いた財産である。学費もそうだ。彼は前半生で稼いだ金を，自分自身に投資したのだ。

忠敬は日食の予測計算ができる学者だった。子午線１度の距離を実測するという目的を持ち，技術の粋をこらして測量を続ける忠敬は，真理はごまかせないことを，科学者として充分に承知していた。近年の三角測量法より，伊能図の方が正確であったと聞く。航空写真法や人工衛星利用で分かったのだ。

伊能忠敬の話は，第２の人生を充実して送った人間としての伝記本が何冊かある。しかし，修身の教科書にでも出てきそうな彼の人生は，小説にしにくいのだ。

そこを井上ひさしが，いろいろな事件に忠敬を巻き込んで小説にしてしまった。ただ，忠敬の測量日誌や日程は頑固に史実に基づいている。毎日，歩測や間縄(けんじょう)による距離計測，方位盤による角度計測，夜は象限儀による天体観測等をし，測量結果を整理しながら，10里(40km)以上を行くのである。これは大変なスピードだ。この史実を変えるわけにいかないから，事件はどうしても夜に起きる。

これらの事件に対して，科学者としての忠敬の，理性的で偏見のない，そしてヒューマニズムあふれる行動に心が暖められる。また，佐原で名主をしていた実務家の目には，役人達の虚栄や無能さがいやでも映ってしまう。これは読んでほしいところだ。

小説の中では，あれほど愛していたおエイさんは，忠敬のもとを去ったままで終わってしまった。作者は忠敬の１年間を書くのに５年もかかり，尻切れとんぼで終わってしまったのが残念である。

この本の文庫版が講談社から出ているが，現在一部が在庫切れである。一方伊能忠敬測量開始200年記念行事が今年からいろいろ企画されているので，必ずや重版が出ると思います。

(1998.2.15)

[リバイバル感想]

いつもは行かない古本屋の天井際に、この初版本のセットを見かけて購入した。時々ある、本との運命的な出逢いである。本と目と目が合って、たちまち恋に落ちたわけだ。本書はその時点で既に文庫本化されており、2001年にはNHK正月時代劇として放映されたという。今は電子版で読むことができる。

2015年に、忠敬の出身地である千葉県香取市佐原の伊能忠敬記念館を訪問したことがあるが、その時の資料は手元に何も残っていない。あこがれの聖地であったが、どうしたのだろうか。その日の直前に訪れていた某施設の写真はあるのに。

さて、伊能忠敬の旅は業務であり、当時の最先端の科学調査である。この本の主題の東蝦夷調査で、忠敬は襟裳岬に行けなかった。本書では、その手前のえりも町ホロイヅミまでの三里たらずに８時間を要し、わらじは予備も含めてボロボロで、裸足で到着したと井上ひさしは書いた。

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.

この小説には忠敬の日記も引用されており、まさしくその通りの記述である。暗くなってしまい、迎えの人夫の提灯に、地獄に仏とはこのことかと、助けられたとある。この厳しい旅を、統率できる彼の人望は素晴らしい。

襟裳岬(2010年11月)

そこから先の襟裳岬には道も無く、干潮時に歩けるなぎさも無く、襟裳岬を泣く泣くショートカットしたようである。

所が最終的な伊能図には襟裳岬が見事に描かれている。一体どのようにしたのかはどなたかに教えていただきたい。

ここで、一つのユニークな徒歩の旅の姿がある。業務としての旅だ。それもＡ地点からＢ地点に行けば良いのではなく、その経路は海岸線であること、という厳しい条件が付けられている。この最初の伊能測量は、大した成果を期待していない幕府に対して、ほとんどを自腹で賄い、一生に一度のチャンスを活かし、幕府が腰を抜かすほどの成果を報告し、全国測量という彼の大望を実現する大事な試金石であった。でも襟裳岬が空白になってしまう。幕府の要人たちはこの地の険しさを知らないので、空白は忠敬の怠慢程度にしか思わないだろう。この時の忠敬の心中はいかばかりであったか。

違うかもしれないが、私の勝手な憶測は、襟裳岬を省いて、実際に測量した地点の地図を作ったのではないかというものだ。幕府の重鎮は襟裳岬を知らない。なので、実は測量できなかったと言う必要はない。江戸にもどって、最初の地図を制作する中で、彼の科学者としての良心と、でも日本全国測量という大望との狭間で苦しんだのかもしれない。天の声は、蝦夷はまだほとんどが未計測だ。再度計測するチャンスが必ずある。次のチャンスを得ることの方がはるかに重要だと告げたに違いない。

この業務としての旅や走りは、人間の特有のものである。飛脚などの業務としての走りもあるが、それはＢ地点に早く着くことだけが求められる。この経路を指定された業務の旅というのは、きわめてまれなのではないだろうか。仕事の成果はＢ地点ではなく、その経路データにある。

そして現代の我々は、何によらず、そのプロセスにも多くの価値があることを知っている。

(2020.6.20)

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.